2. 寄稿：古民家と生きる

建築家 瀧下嘉弘

私が古民家に魅かれたのは 1963 年、大学進学のために東京へ来た時であった。六本木の防衛庁の近くにその古民家は在った。太い大黒柱と曲がった梁組と高い天井、モダンなキッチンには真っ白い大きな冷蔵庫、広い空間を温める床暖房が気持ちよかった。寒くて暗いという印象を持つ古民家がこんなに快適に近代的にそして魅力的に住める事を知り衝撃を受けた。その家主は美術専門の出版社を経営しているアメリカ人で、群馬の田舎から六本木へ古民家を移築して住んでいたのである。

そのころ、生まれ故郷の岐阜では関西方面へ電力を供給する関西電力が荘川に御母衣ダム、九頭竜川に九頭竜ダムを建設し、多くの村が湖底に沈んでいった。何百棟という古民家は消滅したが、あるものは名古屋、横浜、東京へ、また、アメリカへも移築された。新宿の「白川郷」や渋谷の「ふる里」は移築し、レストランに再生させた貴重な成功例で珍しかった。アメリカでは合掌造り古民家が鉄板焼きレストラン「Benihana of Tokyo」として生まれ変わり、大いに繁盛した。1960 年代に古民家という言葉はあまり使われていなかったような気がする。そのような時代であった。

鎌倉で借家に住んでいた父とマイホームを建てようと移築出来る古民家を探していた時、白山麓に水源をもつ九頭竜ダム建設が始まり、多くの村が水没寸前となった。水没する村々は穴馬郷と称し、非常に不便な豪雪地帯の山奥で、平家の落人伝説のある日本の秘境であったが、生まれ故郷の奥美濃郡上から油坂峠を越えた日本海側の越前に在った。早速、みんなで見に行くことにした。穴馬郷の伊勢村の元庄屋さんの家に入った瞬間を今でも覚えている。農家特有の優しい、穏やかな、臭いが私を包んだ。それは昔の日本の匂いで、歴史を紡ぎ続けてきたホットする空間であった。大きな柱、曲がった太い梁組、高い天井に私は圧倒され、これだと思い興奮した。その時、運命が動いた。この素晴らしい合掌造りの家を只で持って行って欲しい。来月は雪が降るから、解体が困難になる、今しかないと云われた。私の脳裏に六本木の古民家が一瞬浮かんだ。早速、その場で紙切れを一枚探し出し、後で問題が生じないように簡単な契約書を交わした。形式ばかりの五千円で譲渡するという契約内容にした。法学部の学生としては、生まれて初めての法行為である！

こうして家は偶然にも簡単に手に入れたが問題は土地である。贅沢にも富士山と海が見え、安いという三拍子が揃うところを探し続けて一年半の歳月が過ぎていく。やっとのこと見つけた条件に合う土地は鎌倉の梶原大峯というところで、名前の通り最も標高の高い処に家を建てることになった。三拍子揃ったとは言え、水道、電気、ガスが無かった。しかし鎌倉市街と海が一望できおまけに富士山が見える場所に住めるのなら、雨水を集めてでも暮らそうと覚悟を決めた。だが、さすがに、最低、電気と水は必要だと考え直した。そこで近隣の地主たちに声をかけ協働で水を引き、電気は藤沢の東電との交渉は学生の私が

役目を負った。電話を引く事も困難であった時代だが、父が外国特派員で通信が必要だと訴えて、意外と早く引いてもらえた。

大工仕事は故郷郡上の大工さんにお任せした。なんと 40 日で完成した。私は運転手や岐阜から来た大工さんの世話係をした。幸運にも、そのころ大学は反米、ベトナム戦争反対、授業料値上げ反対等の激しい学生闘争で構内には入れず、授業も少なく、私のようなノンポリの学生にとって時間はたっぷりあった。卒業式もなく、就職もしないまま、夢にまで見た、古民家移築が終ると同時に、そこでの生活をせぬまま世界一周の放浪の旅に出た。無銭のヒッチハイク。世界 36 箇国を一年半かけ巡るという旅をした。帰国後、将来の自分の進むべき道を思案する中、父のすすめで関西の古美術商を紹介してもらい、すっかり、古美術に接する喜びを見出す。店を構えず自宅の合掌造りの大きな三角屋根裏で商売をするという、簡単で、面白い、変わった商法を仕事にすることにした。予約制で、鎌倉駅の西口と我が家とは私が車で送り迎えをした。誰も来ないかと思ったが、商売は口コミで繁盛した。

ある日、超富豪の外國人の顧客が富豪の友人を連れて来た時、我が家の建築に興味をしめし、古美術も好きだけど、この様な古民家を軽井沢に建てて貰えないかと云われ驚いた。自分は建築士ではない。面白い！無鉄砲でも何とかしてみようと思った。そこで、故郷で呉服商をしていた母親にまだ古民家が残っていないかと聴くと、あの村にはないが、隣村に良さそうな合掌造りがあるとのこと。早速、超富豪に見学に行きましようかと尋ねたら、即ＯＫとなった。これで、人生が又狂ったのである。
其の後、一級建築士資格になる為に猛勉強の末取得、建築士としての人生が始まったのである。

超富豪の家は今でも軽井沢にしっかりと立っている。人生は面白い。以来、口コミで予期せぬ建築の仕事が入って来る。アルゼンチンや米国へ 4 棟、国内は 36 棟ほど移築再生した。同時に、日本の古美術と古民家の魅力で国内外の大勢のお客さんに恵まれた。これも日本固有の伝統文化を世界に紹介する役目の一旦を荷っているかとちょっぴり自負しているところである。

私にとっての古民家は、一言でいえば、生きる喜びをくれる大切な家族で、伝統の持つ力に生かされてきた日々であった。自然に畏敬の念を持っていた私たちの先輩の気持ちを理解し実感できたことは有難い事だと私自身感謝している。

「我家の古民家」は移築してもう直ぐ 60 年経つことになる。

瀧下嘉弘（たきした・よしひろ）
建築家。1945 年岐阜生まれ。早大卒。
NPO 日本古民家保存協会理事長。ハウスオブアンテイックス社長。米国コルビー大学名誉博士号。大工の技法を伝える「仕口堂」主人。

補：寄稿のバックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/professional に掲載